

発 明 文 化 論

〈第 79 回〉

丸山 亮

宝 塚 百 年

宝塚歌劇団が初公演から百年を迎えた。阪急などを起こした実業家、小林一三が庶民の娯楽として少女のみの歌劇団を持ちたいと望んだ夢は実現し、その活動は一温泉地の宝塚から日本全土へ、さらに海外へと広がっている。

小林一三はもともと芝居好きで青年期には近松や西鶴を好んで読み、小説家を志した時期もあったようで、志向は宝塚にも幾分か反映しているのだろう。少女のみによる歌劇団という性格付けは、もちろん男優中心の歌舞伎など伝統演劇の裏返しだろうが、日本ではもともと芸能の担い手として、女性が重要な役割をはたしてきた。神事を起源とする巫女や、そもそも歌舞伎の始まりとされる出雲阿国にしても、女性であった。近世に入って長く男性により営まれた芸能が、ここに先祖返りしたともいえる。

宝塚の成功は、出演者を養成する宝塚音楽学校抜きには考えられない。日本に新しいタイプの芸能を起こすには、組織的な養成機関が必要だった。劇団が団員の養成機関を持つことでは、18世紀の末、王立の歌唱学校に演劇学校が加わり、オペラなどの出演者育成の体制を整えていったコメディ・フランセーズの先例がある。

宝塚音楽学校では、厳しい規律の中で演技力や歌唱力を身に着けるのはもちろんだが、協調性や忍耐など、社会人として必要な資質を得る機会ともなった。小林一三の掲げた「清く正しく美しく」のモットーはまず、2年間の音楽学校の生活で植えつけられていく。

宝塚が初の公演を行う1904年は、第一次世界大戦が始まる年に当たる。日本の欧州へ向ける目には熱いものがあり、このころから欧風文化は憧れの対象となっていく。詩人、萩原朔太郎は「ふらんすへ行きたしと思へども ふらんすはあまりに遠し」と歌った（純情小曲集、1925年）。宝塚はこの憧れを満たすものとなっていき、1927年のグランド・レビュー「モン・パリ」は大成功をおさめた。

フランスでは前世期から、レビューと称される大衆芸能が人気を集めていた。音楽、舞踏、寸劇、曲芸などが華やかな装置、衣装や照明とともに提供され、ムーランルージュやフォーリー・ベルジェールなどがパリでレビューを繰り広げる小屋として評判だった。宝塚は演出家の白井鐵造等をパリに送り込んで、それを日本に移植させる。白井鐵造作のレビュー「パリゼット」（1930年）の主題歌「すみれの花咲く頃」は彼がフランスから持ち帰り、詞をつけたもので、今日まで歌い継がれている。白井はその後、レビューの王様と言われるまでになった。

先日新緑の美しい公園を散歩していると、日比谷図書館が「日比谷に咲いたタカラヅカの華」という展示をしていたので、のぞいてみた。「東京宝塚劇場開場八十周年記念特別展」と副題がある。宝塚の地で少女歌劇団が産声を上げてちょうど20年後、宝塚は東京に常設の劇場を持つまでになり、新たなファンを獲得していく。しかし戦争になって活動は停止し、敗戦とともに劇場は進駐軍の接收するところとなった。展示は東京の開場から歴史をたどり、戦後の公演再開、劇場の建て替えと最近にまで及んでいる。公演のビデオや実物の衣装にも目を引かれたが、宝塚歌劇と原作をまとめて展示したコーナーが興味深かった。シェークスピアから人気漫画まで、洋の東西を問わず、原作とされている。「風と共に去りぬ」も「ベルサイユのばら」も、さらに「雨月物語」や「冥途の飛脚」もある。この雑食性こそが宝塚なのだ。それはまさに日本文化の縮図ともいえよう。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)